

仮定・婉曲とされる古典語推量辞「む」の連体形 －『三卷本枕草子』にある「らむ」「けむ」との比較を中心に－

A Study on the Japanese Classics of the Auxiliary Verb MU
Interpreted as Postulated or Periphrastic Expression:
From the Contrast with RAMU and KEMU in *Sangambon-Makuranosoushi*

山 本 淳
Jun Yamamoto

要 旨：推量辞「む」の連体形は、他の活用形とははたらきが別であり、仮定や婉曲を表すとされてきたが、枕草子を調査した結果、「む」本来のはたらきである、未確認の事実に対する想像を表すものであることが判り、中古語文法では仮定の用法を認める必要がないことを述べた。また、連体形「む」は関連する文節に推量辞が伴われることが多く、かつまた、「らむ」「けむ」とは異なって命令・希求表現との相関を示しているが、そのことが連体形「む」を必要とする条件にはならず、連体形「む」の取捨が話者の主観に委ねられることを説明した。

キーワード：連体形「む」の有無、未確認の事実、恣意性、関連する文節、推量表現

1 はじめに

推量辞「む」について、たとえば、今筆者の手許にある古語辞典を抜き見ると、

④ (主に連体形の用法で)仮に想定する意や柔らかく遠回しに言う意 (仮想・婉曲) を表す。…としたら(その)。…のような。(小学館『全訳古語例解辞典』初版・北原保雄編)のごとき説明が、連体形の用法として特立して述べられているが、それまでにもこうした説明は一般によく行われていたように思う^(注1)。仮定であるか仮想であるか、あるいは婉曲であるか臆化表現であるか、その説明に用いられる語に違いはあれ、意図するところに変わりはない。このように説明されている推量辞「む」の連体形は、古典にしばしば使われているのに対し、現代語では、

彼にそんな酷いことは言えようはずもない (作例)

のように、ごく稀にしか使われず、一般的な言い方とは見なされない。つまりは、「む」を出自とする口語の「う」あるいは「よう」が、連体形の用法を「む」から十分には引き継いでこなかったと考えられるのである。そのために、江戸時代にもなると、この連体形「む」の意味合いが理解しづらくなって、たとえば、

表のは今の人も言へども言葉の中にありて勢迫れるをば、かたへは落とし、坐ゑて言ふ。

たとへば「帰らむ人に」「逢はむ日までに」など言ふべき言葉を、里には「帰ル人ニ」

「逢フ日マデニ」とも言ふたぐひなり。みな今の人言葉に詳しからぬがゆゑなり。

(竹岡正夫・中田祝夫『あゆひ抄新注』281頁)

などと、富士谷成章はその差異に注意を向けるよう警醒している。

上の簡単な経緯の説明からしても、古典語に特有の用法であることがすぐさま知れるのであるが、そもそも中古語において、この「む」はどのように使われていて、どのような性格を帯びたものであったのか。この、根本的とも言える問題については、これまでも様々な角度から検討されてきてはいるが、いったん白紙に戻して、再度筆者なりの観点から捉え直してみたい。なお、以降この「む」を単に「連体形『む』」とし、その場合はこの用法を特に限定して示しているものとする。

2 連体形「む」に関する先行研究

推量辞「む」が、未来の事象を表すものではなく（テンスに関わらず）、単なる予想を表すものであることをつとに説いたのは山田孝雄だった^(注2)のではないかと思う。それでも<「む」=未来事象の表示>という考えがその後もなされて、連体形「む」についてはその説明だけでは十分ではないとされる。根来1989によると、「む」が仮想を示す、という基本的な考え方は、山岸徳平によってなされたのが始まりではないかと説明される。その後、仮想あるいは仮定という用法は、「む」が本来持つ意味ではなく、使われる文脈に沿って成立する解釈の一つであることが、多くの研究者によって指摘されてきている^(注3)。たとえば、和田1994などでは、その立場から一貫して古代語の「む」について、その性格が明らかにされている。

3 連体形「む」の有無

この「む」の有無による意味差はわれわれ現代人にとって理解しにくい。連体形「む」使用に関して、

- ①ある一定の条件下に必然的に行われるのか（他の語と共起する関係にあるのか）、
 - ②話者の主観に委ねられて恣意的に用いられるのか、
- その使用に際する恣意性如何についてはよく解っていない。

そこで、まずは連体形「む」の実例（むろん「仮定」「婉曲」と説明されているものに限る）を見ておきたい。推量辞「む」を調べるにあたり、資料として好ましいのは、物事が書き手の視点の中軸に据えて書かれてある、つまり自照性の強い、日記や随想であろうと思われる。ここで選んだ枕草子は、日記的章段や随想的章段を多く含んでおり、言語量こそ源氏物語に劣るものの、研究対象として十分な資料であると言えよう。枕草子の本文は、大きく分けて三卷本系統、能因本系統、堺本系統あるいは前田本の4系統に分類・整理されている。田中重太郎『校本枕冊子』（古典文庫刊）の主要対校本文を用い、3系統3本（三卷本系陽明文庫本または弥富本・能因本系三條西本・前田本）の対校を適宜私意によって表記を改めて示すこととしたい。まず、連体形「む」の有無が、本文の異同に関係しているものを見る。a三卷本系（陽明文庫本または弥富本）とb能因本系（三條西本）との比較で見る（c前田本の当該箇所も《 》内に示す）と、

- ① a「さてこそは、上襲着たらむ童もまゐりよからめ」
b「さてこそは、上襲着たる■童もまゐりよからめ」
《c：この章段欠》（三條西本6段「大進生昌が家に」27頁43行）
- ② a暁に帰らむ人は、装束などいみじううるはしう、……
b暁に帰る■人の、昨夜おきし扇、懷紙もとむとて……
《c：暁に帰る人の》（三條西本28段「暁に帰る人の」84頁1行）
- ③ a怪しからむ女だに、いみじう聞くめるものを。
b怪しき・■女・、いみじく聞くめるものをば、……
《c：当該箇所なし》（三條西本40段「藏人おりたる昔は」105頁40行）
- ④ a「知りたらむ人もがな」と言ふを聞こし召して、……
b「知りたる■人もがな」と言ふを聞こし召して、……
《c：この章段欠》（三條西本136段「頭の弁の御もとよりとて」404頁10行）
- ⑤ aおのづから睦まじくうち知りたらむ受領の、国へ往きていたづらならむ、……
bおのづから睦まじくうち知りたる■受領また国へ往きていたづらなる・、……
《c：うち知りたらむ受領などの》（三條西本176段「六位藏人などは」504頁10行）
- ⑥ a忌みたらむやうに、口をふたぎ、顔をもて……
b忌みたる■やうにて口をふたぎ、顔をふたぎて……
《c：忌みたらむやうにて》（三條西本307段「宮仕へ人のもとに」796頁3行）

- [7] a消息をいはむに、よかなりとはたれか・言はむ。
b消息をする■に、よかなりとはたれかは言はむ。
《c：この章段欠》（三條西本6段「大進生昌が家に」26頁35行）
- [8] aかしづき据ゑたらむに心にくからず覚えむ、ことはりなれど、……
bかしづき据ゑたる■に心にくからず覚えむ、ことはりなれど、……
《c：据ゑたらむ》（三條西本21段「生ひ先なくまめやかに」55頁11行）
- [9] a物のをりなど、人のよみ侍らむにも、「よめ」など仰せられば、……
b物のをりなど、人のよみ侍る■・も、「よめ」など仰せられば、……
《c：人のよみ侍らむにも》（三條西本104段「五月の御曹司のほど」311頁90行）
- [10] a顔・いと憎げならむ人は心憂しとのみ宣へば、……
b顔のいと憎げなる■・は心憂しとのみ宣へば、……
《c：この章段欠》（三條西本57段「職の御曹司の」167頁16行）
- などが、三卷本系にあって能因本系にない「む」の例として挙げられる。また逆に、三卷本系にない能因本系に「む」とある例として、
- [11] a宣ひあはせて遣りたまふ■ことばは聞こえず、……
b言ひあはせて遣りたまはむこと・は聞こえず、……
《c：遣りたまふらむことは》（三條西本42段「小白河といふ所は」112頁33行）
- [12] aましておとがひ細う愛敬後れたる■人などは、あいなくかたきにして……
bまいておとがひ細く愛敬後れたらむ人・は、あいなくかたきにして……
《c：この章段欠》（三條西本57段「職の御曹司の」167頁17行）
- [13] a「・・まだ縫ひたまはぬ・■人に直させよ」
b「ただまだ縫ひたまはざらむ人に直させよ」
《c：縫ひたまはざらむ人に》（三條西本100段「ねたきもの」284頁16行）
- [14] aすきずきしき・■下衆などの・・、人などに語りつべからむ・・をがな、……
bすきずきしからむ下衆などにても、人・・に語りつべからむにてもがな、……
《c：すきずきしからむ下衆など》（三條西本103段「口惜しきもの」296頁10行）
- [15] aただ思ふ■こと・・を書かむと・……
bただ思はむことの限りを書かむとて……
《c：思はむなりの限りを》（三條西本144段「取り所なきもの」426頁8行）
- [16] a齋院より御文の候ふ■にはいかでか急ぎあけ侍らざらむと……
b齋院より御文の候はむにはいかでか急ぎあけ侍らざらむと……
《c：この章段欠》（三條西本91段「職の御曹司におはしますころ」244頁79行）
- の6例が挙げられる。今度は、三卷本系（陽明文庫本）および能因本系（三條西本）に共通して「む」とあるものが、c前田本にない例を探せば、
- [17] aたどたどしきを聞きつけたらむは、何心地かせむ。
cほのかなる声を聞きつけたる■は、まことに限りなくをかしく覚ゆ。
《b：聞きつけたらむ》（三條西本3段「正月一日は」13頁61行）
- [18] aよろしき歌などよみて出だしたらむよりは、かかる事はまさりたりかし。
cよろしき歌などよみ・・・たる■よりは、かかる事はまさりたりかし。
《b：よみたらむよりも》（三條西本109段「殿上より」336頁6行）
- の2例を見いだす。逆に、前田本にあって三卷本系（弥富本）にない「む」は、次の1例である。
- [19] a女などのある■所をも、などか忌みたるやうに……
c女などのあらむ所にも、などか忌みたるやうに……
《b：女などのあり所》（三條西本5段「思はむ子を法師に」20頁6行）

上例1～16は、本文の異同が主として「む」の有無に左右される例であって、本文の異同が「む」の有無に帰されない例はここでは除外する^(註4)。これらを通覧すれば、三巻本系にあって他系の本に「む」がないことの方がそれぞれ逆のケースに比して少々多いことになる。ただし、これは偶然の結果であろう。

上に用例を示したように、全く一致が見られないもしくは2本一致して「む」のない例が19例ある。対して上記3本共通して「む」が表れているのは、70例^(註5)を数え、19対70となり、総て一致して「む」のある例が他方の4倍弱に相当することがわかる。これは、中古和文において、連体形「む」が頻繁に用いられていたこと、そしてしかるべき所には省略されること少なく、かなりの割合で用いられていたことを意味している。

4 連体形「む」の表れる環境

前節では、異本間における「む」の有無を簡単に見たのであるが、ここでは表れるものだけを取り上げて、その出現する環境について見ておきたい。出現する環境としては、様々な視点から見る事が可能であろうが、連体形「む」がかかってゆく文節が展開してゆく表現（以下A～E）によって、この「む」の性質を捉えたい。実は、この問題に関して、小松1992や三宅1996によって、すでに詳細な検討がなされているのだが、疑問・命令・希求などの各種表現と共に起る連体形「む」の例をも含み込んで、改めて整理してみたい。前節とは変わって、テキストに岩波新古典文学大系本を用い、適宜表記を改めて示す。陽明文庫本を底本とし、欠損部を内閣文庫本によって補ったものであり、欠損部を弥富本に依った『校本枕冊子』とは本文が若干異なっている。テキストの違いによる結果の違いはないとは言えないが、結論に影響を及ぼさない点において、その差を考慮しないことにする。

連体形「む」は、連体用法であっても準体用法であっても、いずれも後に続く表現に大きな変わりはない。枕草子で観察された「む」の後の表現は、以下に整理される。

- A 推量表現
- B 疑問表現
- C 命令表現（禁止表現も含む）
- D 希求表現
- E 平叙表現、その他

連体形「む」の（Ⅰ）連体用法と（Ⅱ）準体用法とに分け、それらを上A～Eに整理して実例とともに説明したい。それに先だって、A～Eの表現に展開してゆく例の処理法について述べておきたい。

まず、連体形「む」の係ってゆく文節が、どういう文節と関係し、その文節が推量・命令・希求を表す語形ないし助辞を伴うか否か、を基にして分類する。

[20] いとひややかに濡れたらむは、いみじう[□]をかし[□]かべ[□]。 (317頁1行)

[21] 「いとわろき名の、末の世まであらむこそ[□]惜し[□]かなれ[□]」といふほどに、……

(92頁3行)

いずれも準体用法の「む」の例であるが、「甲ハ乙」「甲コソ乙」の形容詞文である。連体形「む」を含む文節は、述語「をかし[□]かべ[□]」「口惜し[□]かなれ[□]」に係っている。例20では推量辞「べし」が述語文節に含まれているが、一方例21には推量辞に相当する語は含まれていない。そこで、例20をAの推量表現の例として、例21をEの平叙表現としての例と分類する。同様に、

[22] 最終の車に乗りて侍らむ人は、[□]いかでか[□]とくはまゐり侍ら[□]む。 (297頁14行)

[23] 卵槌の木よからむ、きりて[□]おろせ[□]。 (191頁5行)

[24] さらむ[□]者が[□]な[□]。使はむ、とこそおぼゆれ。 (321頁10行)

などのように、例22は疑問表現、例23は命令表現、例24を希求表現の例として扱う。

こうした中、次のような例に遭遇する。

- [25] ただ疾からむ河に、たちながら横様になげいれて、返りて流れむかたを末と印して

遣はせ。

(266頁9行)

局部的に見れば、「疾からむ河に」は「なげいれて」にかかり、「流れむかたを」は「印して」にそれぞれ係ってゆくが、最終的には「遣はせ」に収束されてゆく。つまり、「なげいれて」「印して」は、ともに継続動作として、いずれも命令を意味する「遣わせ」の文節につながってゆくと判断される。したがってともに、命令表現の例となる。ここで、

連体形「む」を含む文節、あるいはそれが係ってゆく文節の相関する文節の表現内容によって、推量表現、疑問表現、命令表現（禁止表現）、希求表現、平叙表現（その他）に分類する

ことを再度確認し、さらに、

相関する述語文節がさらに別の文節に収束されるとき、収束する文節の表現内容によることも加えておく。さすれば、

- [26] ただいみじうるはし髪持たらむ人も、みな立ちあがりぬ べき 心地すれ。(248頁11行)

- [27] 遅からむ車などは、立つ べき やうもなし。(43頁2行)

などは、収束する文節がそれぞれ「心地すれ」「なし」であり、平叙表現の例としなくてはならなくなるが、これについてどのように考えればよいか。

異論はあろうかとも思うが、筆者は以下の考えに従って、これを推量表現の例と見ておく。例26の連体形「む」の係ってゆく文節「人も」は「む」を含む文節と結合して、「立ちあがりぬ べき 心地すれ」という連文節に相関する。例27においては、連体形「む」の係ってゆく文節「車などは」が「む」を含む文節と結合して、「たつべきやうもなし」という連文節に相関する。すると、述部にそれぞれ推量辞「べき」を内包することになるから、その表現内容は推量表現と判断される。

以下、このような手続きに従って、連体形「む」の例を表現内容別に分類する。

【I-A】 連体用法の「む」が推量表現に展開してゆくもの

一口に推量と言っても、意味領域が語によってまちまちであることは言うまでもないが、一般に推量辞と見られているものをおしなべてここに処理した。その推量辞には、「む」「むとす」「じ」「まじ」「べし」「めり」である。

- [28] 今宵いみじからむ雨にさはらで来たらむは、なほ一夜もへだてじと思ふなめり。

(314頁11行)

- [29] 雨降らむ折は、さはありなむや。

(317頁8行)

- [30] いま、風吹かむ折ぞ来 むとする。

(61頁3行)

例28は、この一文は「なんめり」による推量表現ではあるが、これに関わってくる文節はむしろ「来たらむは」であって、例としている「いみじからむ雨」は「来たらむは」と相関する。例21は、「なむ」の例として処理することもできるが、今回は「む」「なむ」間などの推量としての意味差を解くつもりはないので、いずれも「む」の例として扱っておく。

- [31] 「いもうとのあらむ所、さりともしらぬやうあら じ。いへ」

(98頁6行)

- [32] おのれをおほさむ人は、歌をなむよみて得さす まじき。

(100頁6行)

- [33] 世の中になほいと心憂きものは、人に憎まれむことこそある べけれ。

(279頁2行)

- [34] なほ、をとこは、もののいとしさ、人の思はむことは、知らぬな めり。

(279頁1行)

- [35] いみじうかんじ申されて、いかでさるべからむ折に、心のどこかに対面して申しうけた

まはらむ。

(12頁14行)

例35は、次に示す【I-B】にも関連してはいるが、「いかで～む」という疑問の内部に組み込まれている「む」であって、「む」の係る文節が疑問表現「いかで～む」に展開してゆく

例にはならない。

【I-B】 連体用法の「む」が疑問表現に展開してゆくもの

この用例自体が多くないが、全部で4例の「む」が、疑問表現に続いてゆく。

[36] 年若からむ人、はた、さもえ書くまじきことのさまにや、などぞ覚ゆる。(24頁8行)

[37] 丈の高く、短かからむ人などや、いかがあらむ。(85頁6行)

【I-C】 連体用法の「む」が命令表現に展開してゆくもの

禁止表現に展開してゆくものは、

[38] かの里より来たらむ人に、かく聞かすな。(111頁13行)

の1例あるのみで、あとの10例は命令表現である。

[39] 「これにその白からむ所、入れて持てこ。きたなげならむ所、かき捨てて」
(111頁9～10行)

例39について、「白からむ所」は「入れて」に、「きたなげならむ所」は「かき捨てて」にそれぞれ係るが、継続動作として「持てこ」にも連なってゆくことが確認される。「かき捨てて」の直後には「持てこ」が表現されていないが、同趣表現の省略とも考えられる。

[40] 「難波津も、何も、ふと覚えむことを[書ケ]」と責めさせたまふに、……(23頁9行)

[41] 家に入りゐたらむ人をば知らでもおはせかし。(265頁14行)

例40は、命令形が表示されない例であり、命令の意味を内包する表現と見ておく。

【I-D】 連体用法の「む」が希求表現に展開してゆくもの

「まほし」「ばや」「(も)がな」の例に、「む」が相関する。

[42] なほ、さりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世のありさまも見せならはまほしう、内侍のすけなどにてしばしもあらせばやとこそおほゆれ。(27頁4行)

例42は、異なる2種の希求表現に関わってくる。この場合、最終的には「ばや」に収束されてゆくので、「ばや」の例として扱っておきたい。また、

[43] またむつましう来る人もあるは、清げにうちしつらひて、雨など降りてえ帰らぬも、
をかしうもてなし、まゐらむをりは、その事見入れ、思はむさまにして、出だしたてな
どせばや。(325頁7行)

「まゐらむをりは」と「思はむさまに」は、ともに同一の「せばや」の文節に係っている。

[44] あまたあらむ中にも、心ばへ見てぞ率でありかまほしき。(82頁10行)

[45] 物などやとらすらむ。しりたらむ人もがな。(169頁14行)

以上4例と例24の合わせて5例が、「む」のあとに展開する希求表現の総てである。

【I-E】 連体用法の「む」が平叙表現、その他に展開してゆくもの

平叙表現と銘打ったが、実際は、A～Dに収まらなかった例をここに入れてある。したがって、実際には雑多な各種表現がここに集まっている。

[46] かたみにうち見かはしたらむほどの、生けるかひなさや。(150頁2行)

[47] いささか寄りてしるく見えさせたまふさへぞ、聞こえむ方なき。(304頁3行)

[48] いみじからむものの上手、不用なり。(267頁6行)

などと、併せて7例の「む」の例が見られる。例46は感動表現、例47は強調表現、と一般に説明される。例48は、ここでは平叙表現だが、前節で見た『校本枕冊子』によれば、三條西本・前田本では、述部が「不用ならむ」となり、推量表現によって示されている。

次に、準体用法の「む」の例を見ることにする。

【Ⅱ-A】 準体用法の「む」が推量表現に展開してゆくもの

準体用法の「む」を含む文節が、「む」「じ」「まじ」「べし」「めり」の各語を含む文節に相關する。用例は、以下の通りである。

- [49] さあらむ（雨ガヒドク降ル折ニ来タリスルコト）を、よべも昨日の夜も、そがあなたの夜も、すべてこのごろうちしきり見ゆる人の、今宵いみじからむ雨にさはらで来たらむは、猶一夜もへだてじと思ふなめり、とあはれなりなむ。（314頁9～12行）
- [50] 「さらにただ、手のあしさよさ、歌の折にあはざらむもしらじ」と仰せらるれば、……（24頁2行）
- [51] いと有心にひきいりたるおほえ、はたなければ、さいはむ（里下ガリスルナンテ怪しからんと他人ガ言ッタリスルコト）も憎かるまじ。（79頁12行）
- [52] なほこの事勝負けなくてやませたまはむ、いとわりかるべしとて、……（26頁6行）
- 例49では、連体形「む」の例が2例あるが、冒頭の「む」の例について、相關する文節が「いみじからむ」と離れている。しかしこのことが、両者の意味的な相互関係に支障を来すものにはならない。

【Ⅱ-B】 準体用法の「む」が疑問表現に展開してゆくもの

- [53] ふたりして打たむには生きなむや。（15頁9行）
- [54] たどたどしきを聞きつけたらむは、何心地かせむ。（7頁8行）
- [55] 「まろは何か。ただあらむにまかせてを」などいひて、……（293頁4行）
- 例55について、実際には連体形「む」の後に展開する表現が示されていない。また、倒置した形と解釈しても、実際には「まろは何か」は反語と解される例であるが、見かけ上の疑問表現と解して、ここに含めて扱った。

【Ⅱ-C】 準体用法の「む」が命令表現に展開してゆくもの

命令表現に展開する「む」の例は5例見られる。

- [56] ふたつをならべて尾のかたに、細きすはえをしてさしよせむに、尾はたらかざらむを女としれ。（267頁1行）
- これには、2例の「む」が同じ「しれ」と相關するのであるが、用例のカウントとして、これを別々に数えておきたい。

【Ⅱ-D】 準体用法の「む」が希求表現に展開してゆくもの

- [57] 殿司の、顔愛敬づきたらむ、ひとり持たりて、装束時にしたがひ、裳、唐衣などいまめかしくてありかせばや、とこそおほゆれ。（64頁4行）
- [58] わびては、すきずきしき下衆などの、人などに語りつべからむをがな、と思ふもいとけしからず。（127頁1行）

【Ⅱ-E】 連体用法の「む」が平叙表現、その他に展開してゆくもの

- [59] さもあらむのちには、えほめてまつらざらむが口惜しきなり。（173頁6行）

以上、これにより連体形「む」の、相關する文節の表現内容別に用例数をまとめる（表1）。

表1 【連体形「む」の例】

関連する文節の表現内容		Ⅰ 連体用法「む」		Ⅱ 準体用法「む」		計
A 推量表現	～む	13	計	18	計	67
	～むとす	1		0		
	～じ	2		5		
	～まじ	2	28	3	39	
	～べし	9		11		
	～めり	1		2		
B 疑問表現		5		10		15
C 命令表現・禁止表現		12		5		16
D 希求表現	～まほし	1	計	0	計	8
	～ばや	3		1		
	～(も)がな	2	6	1	2	
E 平叙表現・その他		8		16		24
合 計		59		72		130

全体的な傾向として、ⅠⅡとも、推量表現と結びつく「む」の例が、相対的に多いことが分かる。この点から考えられることは、連体形「む」は、関連する文節に含み込まれている推量辞に支えられ、その推量性を保っているということである。次に指摘できることは、平叙表現と結びつく例も多いことである。特にこれはⅡの場合において顕著である。疑問表現につながるものと命令表現につながるものは拮抗している。全体に占める割合では11～13%程度であり、ともに少ないと言えよう。

5 連体形「む」の下接語

今度は、連体形「む」に下接する語について見てゆく。まず、Ⅰの連体用法59例について、その内訳を用例の多い順に並べると、次のようになる。

人 20例 / 事 8例 / 所 4例 / 折 4例 / 者 3例
 程 2例 / 時 2例 / 後 2例 / 方 2例 / 様 2例
 やう（比況辞の語幹） 2例 / 際 1例 / 中 1例 / 心地 1例
 子 1例 / 童 1例 / 雨 1例 / 河 1例 / 車 1例

以上、異なり語数19語であるが、使用数が2例以上ある語については、やはり単独では用いられにくい例がほとんどである。連体形「む」の下接語について調査した高橋力1998によれば、源氏物語において、形式名詞では「こと（事）」が最多で突出して用いられる下接語で

あり、以下、「かた（方）」「ほど（程）」「ところ（所）」「もの（物）」がこれに続く。実質名詞では、「人」が最も多く、以下「後」「時」「様」「心地」「折」と続くにつれ、使用頻度も下がってゆく。今回の調査では、採取した用例の母数が少ない分、単純な比較は避けるべきではあるが、源氏物語の場合と大きく違うところはないものと思われる。

次に、Ⅱの準体用法72例について、その内訳を用例数とともに多い順に並べると、

は 21例 / に 12例 / 助辞ナシ 9例 / を 6例 / が 4例
も 4例 /こそ 4例 / には 3例 /こそは 1例 /よりは 1例
にぞ 1例 / にも 1例 / にしもこそ 1例 / にてだに 1例
にても 1例 / をこそ 1例 / をこそは 1例

のようになる。また、これに、連体用法の「む」が係ってゆく体言の下接語についても、同様にしてみる。59例のうち、比況辞「やうに」の2例と願望辞「（も）がな」の2例を除く55例について、新たにこれに加わるものは、

の（主格辞） 3例 / をば 2例 / の（連体格辞） 2例 /
には 1例 / にも 1例 / ぞ 1例 / や 1例 /こそは 1例

である。また、準体用法72例とこれら55例を合わせて示せば、

33例あるもの： は
18例あるもの： に ・ 助辞ナシ
10例あるもの： を ・ も
9例あるもの：こそ
4例あるもの： が ・ には
3例あるもの： の（主格）
2例あるもの： の（連体格） ・ をば ・ にも ・ こそは
1例あるもの： ぞ ・ や ・ こそは ・よりは ・ にぞ ・ にそもこそ
にてだに ・ にても ・ をこそ ・ をこそは

という結果になる。この中で、助辞ナシがかなり見られるが、それらは既出の例、

[23] 卯榎の木の下からむ、きりておろせ。 (191頁5行)

[57] 殿司の、顔愛敬づきたらむ、ひとり持たりて、…… (64頁4行)

などを見れば、ヲ格の非表出であることが一目瞭然であり、また次の

[52] なほこの事勝負けなくてやませたまはむ、いとわりかるべしとて、…… (26頁6行)

にしても、「やませたまはむ」と「わりかるべし」とが主述の関係にあることは明白である。

中村幸弘・碁石雅利編『古典語の構文』（2000・おうふう）によれば、

[60] 痛ク酔ヒナム、此ノ殿ニ候ヒテ酔醒テコソハ罷出メ。
(今昔物語集巻22第8、岩波大系本4巻241頁14行)

の例を挙げ、

「いたく酔ひなむ」を準体法とだけ解したのは、どことどんな関係付けになるのか、説明が困難です。(中略) 準体法のままですと「想定」です。それが、このように条件句を構成すると、他の仮定条件と同じ資格を持ちますから、「仮定」と呼んでよいように思います。 (109～110頁)

のように説明している。また、大系本校注者による、当該箇所^{注6)}の頭注でも、この「痛ク酔ヒナム」を条件句と認めているところからすれば、上の説明も得心がゆく。翻って、枕草子の連体形「む」(助辞ナシ)は、上に見たごとく、準体法を構成していることが明白であって、まだ条件句を構成するものとなり得ていないため、例60と同等には扱えず、したがって仮定の用法を積極的に認める必要がここにはない^(注6)。

6 「む」の周辺にある連体形「らむ」「けむ」

推量辞として「む」に共通する助辞「らむ」「けむ」について、「む」同様に見ておく。まず枕草子に見られる、連体形「らむ」「けむ」（連体用法・準体用法）の用例数について、表に掲げて示す（表2および3）。

表2 【連体形「らむ」の例】

相関する文節の表現内容	I 連体用法 「らむ」	II 準体用法 「らむ」	計
A 推量表現	2	0	3
B 疑問表現	0	1	1
C 命令表現・禁止表現	0	0	0
D 希求表現	0	0	0
E 平叙表現・その他	6	11	16
合 計	8	12	20

表3 【連体形「けむ」の例】

相関する文節の表現内容	I 連体用法 「けむ」	II 準体用法 「けむ」	計
A 推 量 表 現	4	1	5
B 疑 問 表 現	1	1	2
C 命 令 表 現 ・ 禁 止 表 現	0	0	0
D 希 求 表 現	0	0	0
E 平 叙 表 現 ・ そ の 他	4	15	19
合 計	9	17	26

これによれば、連体形「らむ」「けむ」いずれも命令表現および希求表現に展開する例がない。この領域は連体形「む」が専ら担当するのである。このことは至極当然であり、「む」が単純に推量を示すのに対して、「らむ」および「けむ」は辞書的な意味では、「らむ」は現在推量であり、「けむ」は過去推量である。通常、命令や希求は、未然のことに對してそうなるように要求したり切望したりするのであって、けっして現行の事象や過去に起こった事柄に對して行うものではない。しかし、現在や過去のことに對して推量したり疑問を抱いたりすることは十分可能であり、推量表現や疑問表現に展開する、連体形「らむ」「けむ」の用例は、平叙表現につながるものに較べてはその使用度が低いながら存するのである。

では、相関する文節の表現内容別に、連体形「らむ」「けむ」の用例を見てみよう。

【Ⅰ-A】 連体用法の「らむ」「けむ」が推量表現に展開してゆくもの

- [61] 人のいふらむ事をまねぶらむと。(58頁2行)
 [62] その聞きつらむ所にて、きとこそはよまましか。(131頁7行)
 [63] かく見る人々も、みな家のうちいでそめけむほどは、さこそはおほえけめなど、覩じもてゆくに、おのづからおもなれぬべし。(227頁9行)
 [64] この比、その折さしいでけむ人、命ながくて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし。(42頁4行)

例63は、意味上の切れ目が「など」の直前にあり、「みな家のうちいでそめけむほどは、さこそはおほえけめ」で一続きの意味をなしている。また。例64は、反実仮想の表現に展開する例であり、これを推量表現の一種と認めてここに分類した。

【Ⅰ-B】 連体用法の「らむ」「けむ」が疑問表現に展開してゆくもの

ここに該当する「らむ」の例はない。

- [65] 薬玉たまはすれば、拝して腰につけなどしけむほど、いかなりけむ。

【Ⅰ-E】 連体用法の「らむ」「けむ」が平叙表現、その他に展開してゆくもの

- [66] さて内のわたらせたまふを、見たてまつらせたまふらむ〔女院ノ〕御心地、思ひやりまゐらすは、とびたちぬべくこそおほえしか。(165頁7行)
 [67] 御前にさむらひけむ人さへこそうらやましか。(26頁1行)

例66について、「とびたちぬべくこそ」とあるが、「御心地〔ヲ〕思ひやりまゐらすは」のごとく、「らむ」の係ってゆく文節は意味上ここには及ばない。

【Ⅱ-A】 準体用法の「らむ」「けむ」が推量表現に展開してゆくもの

ここに該当する「らむ」の例はない。

- [68] なかばかくしたりけむは、えかくはあらざりけむかし。(122頁9行)

【Ⅱ-B】 準体用法の「らむ」「けむ」が疑問表現に展開してゆくもの

- [69] みそか盗人の、さるべき隈にゐて見るらむを、たれかはしらむ、暗きまぎれに、忍びて物ひきとる人もあらむかし。(162頁4行)
 [70] 「こなたの人の心地、うち聞きはじめけむ、いかがにくかりけむ」(190頁7行)

【Ⅱ-E】 連体用法の「らむ」「けむ」が平叙表現、その他に展開してゆくもの

- [71] むつまじき人などの、めさまして聞くらむ、思ひやる。(153頁4行)
 [72] 貫之が馬のわづらひけるに、この明神の病ませたまふとて、歌よみてたてまつりけむ、いとをかし。(265頁5行)

上に見たように、連体形「らむ」「けむ」は、平叙表現につながる例が、ⅠⅡとも他に比して多い。もっとも母数が少ない中での結果のため、割り引いて考える必要があるが、少なくとも「む」における状況と引き比べた場合、明らかに差がある。すなわち、連体形「む」が展開してゆくものとしては推量表現が多く、平叙表現に展開する例を上回っていることとの傾向差である。

次に、連体形「らむ」「けむ」の下接語について見る。「らむ」の連体用法では、

2例あるもの： 人 ・ 事 ・ 程

1例あるもの： 所 ・ 心地

となり、「けむ」の連体用法では、

3例あるもの： 人 ・ 程

1例あるもの： 年 ・ 顔 ・ 法師

となる。また、「らむ」の準体用法では、

6例あるもの： も

3例あるもの： 助辞ナシ（6）

1例あるもの： は ・こそ（2） ・を（2）

のごとくであり、「けむ」の準体用法では、

10例あるもの：こそ（12）

4例あるもの： 助辞ナシ（7）

1例あるもの： は（2） ・ も ・ ぞ

のごとくである。上の（ ）内の数字は、連体用法の場合、係ってゆく体言に下接する助詞の例を加えたものである。このうち、連体用法においては、「らむ」「けむ」もことさら違った傾向を示しているようには思われない。準体用法については、助辞ナシはともに同程度用いられていると見てよいであろう。最多使用のものについては、「らむ」が「も」であり、「けむ」が「こそ」であるという、若干の事が指摘できようか。すでに見たところだが、連体形「む」は、「は」と結びつく例が多く、「も」や「こそ」との結びつきは「は」には及ばない。

7 連体形「む」と連体形「らむ」「けむ」

前節では、連体形「む」と連体形「らむ」「けむ」との相違について、銘々がつながってゆく表現の違い、下接する語の違いについて触れた。繰り返しになるが、以下確認しておく。

- （1） 相関する文節の表現の違いが「む」と「らむ」「けむ」との間に見られ、「む」は推量表現、「らむ」「けむ」は平叙表現に展開する傾向が強いこと。
- （2） 連体形「らむ」「けむ」は、未然の事態に対して要求したり切望したりすることを内容として持つ、命令表現・希求表現には展開することがないこと。対して「む」は、そのいずれにも展開してゆく例があること。
- （3） 下接語について、連体用法の場合の、係ってゆく体言に大差は見られないが、準体用法の場合の、これに接続する助辞に傾向差が見られること。ただし、その理由は定かではない。

以上は、連体形「む」と連体形「らむ」「けむ」とが担う意味領域の差に基づくことが考えられる。そもそも「む」自体テンスに関わることなく、広く想像する際に用いられる推量辞である。これを連体形に限って見ても変わることはない。次の用例によって、その意味を確認してみる。

[53] ふたりして打たむには生きなむや。 (15頁9行)

女房たちが可愛がっていた犬翁丸が、帝の大切にしていた猫に悪さをしたため、その咎により、陣屋の外に打擲の上捨てられたことを女房たちは知る。後日翁丸に似た犬を発見するが、それらしき仕草をまったく見せないの、世話をしていた右近の内侍に翁丸かどうか確認をとるシーンである。右近の内侍の言葉で、これは翁丸ではない、男二人してうち捨てたのではおそらく生きてはおりますまい、と話しているのである。翁丸制裁の映像は実際に見て自ら確認しているわけではなく、すでに「ふたりして打」った事実を知るのみである。すなわち「未確認の事実」についての想像である。

[30] 「いま、秋風ふかむ折ぞ来むとする。まてよ」 (61頁3行)

これは、蓑虫の譚である。説明するまでもなく、「これから秋風がふく季節になるが、その時また迎えにこよう、それまでお待ち」と、親蓑虫が子に対して言うのである。まだ、秋にはなっておらず、風が秋の到来を告げるという事実がまだない状態にある。つまり、「未然の

事態」について想像しているわけである。未然の事態、それはとりもなおさず未確認の事態でもあり、話者自身の確認を経ているという点において、例53と例30は共通している。これに対して、「らむ」は今現在の事態を想像するという点、「けむ」は過去に起こった事実を想像するという点において、「む」よりも意味領域が狭いことになる。(3)は別として、(1)(2)に至らしめている原因は、推量の意味合いの差にあることが言えよう。

さて、ここに積み残してきた問題がある。それは、本稿第3節において触れた、「む」の有無は①②いずれの理由による産物なのか、という問題である。その点を探るべく、連体形「む」が表れる環境について、検討したことを縷々述べてきたのであるが、解答はとうに出ている。連体形「む」は、話者の主観に基づいて、「未確認の事実」であることを明示する必要があると判断された時に表れるのである。これは、ある条件の下に必ず行われる、という意味ではない。本稿第3節に示した数々の用例が、そのことを物語っている。連体形「む」が推量表現と共に起こりやすいことが本稿第4節によって確認できているにもかかわらず、すでに挙げた例を顧みると、

① b「さてこそは、上襲着たる■童もまゐりよから^め」 (『校本枕冊子』27頁43行)

③ b 怪しき■女、いみじく聞^くるものをば、…… (『校本枕冊子』105頁40行)

⑧ b かしづき据ゑたる■に心にくからず覚え^む、…… (『校本枕冊子』55頁11行)

⑭ a すきずきしき■下衆などの、人などに語りつべから^むをがな、…… (『校本枕冊子』296頁10行)

⑮ a ただ思ふ■ことを書か^むと…… (『校本枕冊子』426頁8行)

などのように、推量表現を伴いつつも、■に「む」とありそうな、少なくとも他本には「む」とあるところに、それがないのである。また、その他の表現についてみても、

⑦ b 消息をする■に、よかなりとは^{たれかは言はむ}。 (『校本枕冊子』26頁35行)

⑬ a「まだ縫ひたまはぬ■人に直さ^{せよ}」 (『校本枕冊子』284頁16行)

④ b「知りたる■人^{もがな}」と言ふを…… (『校本枕冊子』404頁10行)

のように、いずれの表現であっても連体形「む」のない例があり、連体形「む」と収束する上のごとき各種表現とは、必然的な関係で結ばれてはいない。相関する推量・疑問・命令・希求の各種表現は、必ずしも連体形「む」を上要求しないのである。従って、①ではなく②と考えた方が、その答えとしては妥当である。

しかしながら、連体形「む」の表れには、その前提条件にはなり得ないものの、連体形「む」が相関する文節に、推量辞が伴われる傾向がある、という指摘は可能である。そしてそれは、連体形「らむ」「けむ」にも当て嵌まる事実である。ただし、連体形「らむ」「けむ」は、未然の事態を表現する命令・希求表現には展開しない。その点において、連体形「む」との差が歴然としてくるのである。

8 まとめ

本稿で確認できたことを以下まとめる。

- i 連体形「む」は、未確認の事実について想像する推量辞であり、「む」が持っている本来のはたらきである。
- ii 連体形「む」の有無に関して、話者が未確認の事実であることを明示する必要があると判断した時に表れて、その使用については恣意的である。
- iii 連体形「む」は、未確認の事実についての想像を示すということと関わって、「む」と意味的に相関する文節に推量辞を伴いやすい。
- iv iiiとの関わりから、連体形「む」は、疑問表現・命令表現・希求表現にも展開する。
- v 連体形「らむ」「けむ」は、推量辞「む」の意味領域が異なり、そのために、推量表現に展開することはあっても、命令表現・希求表現には展開しない。

さらに、i に述べた点を重視して、

- vi 現行の辞書類には、連体形「む」の意味に「仮定」を立項しているが、i の説明で十分通用するうえに、中古和文においては連体形「む」が条件句を構成する、確たる例が見いだせていないため、中古中心の古典語では「仮定」の意味記述を必要とはしない。ということも、本稿第5節において触れたところを基に指摘することができよう。なお、このうち、i・iii・viは、先行研究にもすでに明らかにされていることであり、新たな知見ではないと附言しておきたい。

諸注

注 1 三宅1911には、1958年から1988年にかけて出版された、小型・中型古語辞典23編の記述についての調査結果が示されており、それによると、その総てが仮定の意味を認め、18編が婉曲の意味記述を行っているという。

注 2 これに関する記述が、山田孝雄『日本文法論』（1907・宝文館）438頁から441頁にかけて、あるいは453頁およびその近辺に見られる。

注 3 小松1992では、連体形「む」の仮定・婉曲用法は、文脈によって解釈された便宜的なものとしている。不特定の体言に続き、実際に確定したと考えられる事柄において用いられていること、文頭に連体形「む」が表れることが多いこと、推量表現とともに用いられる傾向が強いこと、などを実際の用例から確認している。そのうえで、文頭にはっきり仮定の話であることを読み手に意識させ、推量形の表現とともに用いることで、いっそう読み手に臨場感を与えうることが考えられ、さらには現実性を映し出すための手段として連体形「む」が用いられたのではないか、という旨の説明がなされている。

注 4 3本「む」があっても、本文自体が異なっている例（A）や、三卷本・能因本のいずれかの本文の当該箇所が欠落している例（B）、他本で「む」が欠落して別の語で表現されている例（C）はここには拾っていない。

a・・・なれ・・・ちも

A bそひたち・・・たらん人の心・・・ (274頁9行)

c心またからむ・・・も

aさる事のあらむほとゝきすうちなき

B b・・・・・・・・・・・・・・・・ (577頁24行)

c

aからんか・・・

C bかたちよく・・・なりなと つねによくてあらんは (163頁2行)

c

注 5 3本一致で「む」が用いられる例の所在を頁数および行数によって示すと、20頁1行、20頁1行、47頁24行、48頁28行、49頁36行、49頁41行、52頁70行、54頁1行、54頁2行目、55頁11行、74頁48行、81頁3行、83頁16行、83頁16行、85頁14行、85頁15行、108頁3行、111頁31行、152頁4行、163頁5行、198頁16行、205頁30行、255頁19行、255頁20行、270頁22行、270頁23行、289頁6行、296頁10行、301頁24行、306頁55行、307頁62行、309頁77行、332頁75行、398頁16行、428頁8行、430頁26行、444頁12行、504頁9行、543頁14行、572頁15行、596頁2行、628頁15行、629頁24行、629頁24行、630頁30行、630頁30行、631頁35行、685頁42行、685頁45行、687頁55行、

694頁110行、695頁114行、695頁117行、695頁117行、734頁22行、735頁28行、
735頁28行、735頁30行、735頁30行、737頁42行、739頁53行、740頁60行、
741頁68行、752頁4行、754頁12行、760頁6行、760頁7行、796頁2行、
796頁3行、827頁12行

となる。また、前田本あるいは三卷本系の弥富本・陽明文庫本（『校本枕冊子』の底本）が
当該の章段を欠いているという理由によって、2本一致して「む」の表れているものは、

24頁9行、25頁24行、26頁33行、27頁48行、28頁53行、29頁9行、31頁28行、
167頁15行、168頁27行、218頁23行、220頁44行、221頁52行、222頁60行、
223頁4行、227頁33行、227頁34行、229頁2行、233頁34行、233頁36行、
235頁10行、240頁41行、241頁51行、246頁93行、247頁103行、249頁117行、
249頁117行、251頁136行、406頁21行、410頁15行、436頁11行、441頁60行、
486頁23行、666頁12行、752頁4行

の34例であり、これを加えると、3本一致もしくは2本一致して「む」の表れる例は、都
合104例に上り、連体形「む」の表れる率が上昇する。

注 6 中古語「む」に婉曲の用法を認めるか否かについては判断を俟ちたい。たとえば、

三省堂『例解古語辞典第二版』などに、婉曲用法の「む」として載せてある、

雪のおもしろ降りたりし朝、人のがり言ふべきことありて文を遣るとて、雪のこと何
とも言はざりし返事に、「この雪いかを見ると、一筆宣はせぬほどの、ひがひがしからむ
人の仰せらるること、聞き入るべきかは。かへすかへす口惜しき御心なり」と言ひたり
しこそ、をかしかりしか。（徒然草31段、岩波大系本116頁4行）

の例などは、確実な婉曲「む」の例であると見てよい。ここでは、雪のことに何も触れて
いない手紙を無風流であると受け手は感じており、「ひがひがしき人」と断言してもよさそ
うなところをあえて「ひがひがしからむ人」と表現していると理解される。つまり、断定
的表現をわざと避けた言い方であって、この場合にのみ婉曲用法の「む」を認めてもよい
と思われる。ただし、このような用法が中古の表現として一般的であったかどうか、筆者
山本は知らないため、本稿では中古語「む」の婉曲用法については触れないことにしたい。

参考文献

本文中参照した旨を逐一断ってはいないが、本稿を成すにあたり、以下の先行研究の教示
を受けている。ここに掲げ、謝意を表したい。

- ① 池上秋彦1987「古文における推量（む・らむ・けむ）の助動詞」
（『国文法講座 2』明治書院）
- ② 伊牟田経久1970「「む」の活用と意味」（『月刊文法』2-8）
- ③ 小松光三1992「連体形に連なる助動詞「む」の表現―『枕草子』の場合―」
（『国語と国文学』69-11）
- ④ 関一雄1993『平安時代和文語の研究』（笠間書院）
- ⑤ 高橋力1998「助動詞「む」の連体形の史的変遷―下接名詞に着目して―」
（國學院大學国語研究会平成10年度後期大会発表資料）
- ⑥ 高山善行1993「モダリティとモード―古代語における仮定条件文の帰結表現をめぐる―」
（『日本語学』12-13）
- ⑦ 根来司1989「枕草子の文法」（『国文法講座 4』明治書院）
- ⑧ 三宅清1991「古語辞書の意味記述―助動詞「む」の連体形について―」
（『辞書・外国史料による日本語研究』和泉書院）

- ⑨ 三宅清1996「助動詞「む」「らむ」「けむ」一連体形の〈推量性〉について」
(『岡山大学教育学部研究集録』101号)
- ⑩ 山口明穂1991「平安時代の言葉と思考」(『国語と国文学』68-11)
- ⑪ 吉田金彦1973『上代語助動詞の史的研究』(明治書院)
- ⑫ 和田明美1994『古代日本語の助動詞の研究－「む」の系統を中心とする－』(風間書院)